「」　─近世の随筆

17年度　青山学院大学

★　次の文章は、まず世間に流布している「俗説」を引いた後、「今按ずるに」として自分の意見を述べたものである。読んで後の問に答えよ。

　俗説に云はく、中ごろ、ある、の身となりて、本国に老母ばかりを残し置き、他国にいたり奉公しければ、母を迎へむがため、本国に帰るに、道のかたはらに、盗人なりとて、木にしばりつけてをさらすものあり。立ちよりて見れば、おのが母なり。かの、いかにもしてたすけ　Ａ　と思案をめぐらせども、せんかたなし。この上は、にかけて盗人の名を１ヨモにあらはさんより、２我が手にかけて跡をとぶらはんと思ひ、刀をぬいて、あたりに付き居たる番人どもをきりはらひ、母が首を取りて逃げ去りたり。追ひ散らされたる番人ども、もとのところにかへりて盗人を見るに、首無ければ、ばかりを刑におこなふといへども、首無くして、誰といふことをしらず。

　かのは、母が首をひそかに葬り、主人が方に帰りて、あらましをのべ、「子として母が首をきる、不孝の罪のがれがたし。かかる不孝の身をもつて、君につかふべき様なし。いとまをたまはらば、出家して母が後世をいのりたし」と申しければ、主君聞きて、「汝が所為、孝行の３至極なり。母を生けて恥をさらさせんよりは、首を切りて名をかくし、恥をおほふこころざし、器量、世の常に抜群せり」と、大いに称美せられ、そのままにて仕官しぬ。そのころ、忠孝兼備のと、４とりざたしけるとかや。

　今按ずるに、このが所為、５言語に及びがたし。その故は、昔、宋といふ者の父、賊のためにとらはる。賊、かれを樹にしばりつけて殺さんとする時、鮑寿孫、来たり拝して、父が死にかはらんことをねがふ。賊あはれみて、二人ながら命を助けたり。これをもつて思ふに、右のも、母がからめられたるを見ば、すすんでその刑にかはりて６死せざるや。親のためには、名をも恥をも命をもかへりみるべき事かは。るを、情けなく親を切りて名を隠し、恥を覆はんとはかる。その罪悪、刑に処してもあきたるべからず。もろこしにて、起が、が母を葬る所に至り、よそに見て退きしをだに、楽天は、のに劣れりとて「昔、呉起といふ者有り。母没して喪に臨まず。しいかな、この。その心、にだにも　Ｂ　」とせり。もし母を切りし者を見せば、に等しとそしるべし。かかる大罪人を、孝子とほめて使へるも不思議なり。変にのぞみ難に及ぶ時は、必ず主君の首をも７切りかねまじきくせものなり。おそるべし、にくむべし。

［注］

　＊…中国の地名。現在の安徽省に位置する。

　＊…宋代末期、徽州の人。

　＊五刑…中国の刑罰体系でいう五種類の刑罰。

　＊呉起…中国春秋時代の兵法家。『呉子』の著作で知られる。

　＊白楽天…中国、唐の時代の詩人。以下に引用される詩は、『白氏文集』巻一「慈烏夜啼詩」。

　＊烏の…烏のひなが成長してから、親烏に食物をくわえ与えて養育の恩に報いること。

問１　空欄　Ａ　に入れる言葉として最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　ばや　　②　べし　　③　たり　　④　らむ　　⑤　ざらむ

問２　傍線部１「ヨモ」に漢字をあてるとすれば、どのような字がよいか。最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　世面　　②　余模　　③　広間　　④　四方　　⑤　代母

問３　傍線部２「我が手にかけて跡をとぶらはん」とはどういう意味か。最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　母の首は私が持ち去って、その後ていねいに供養しよう

②　母を救うことはできないが、いつか再びここを訪れよう

③　私が自分で葬送することにより、母の恥を隠そう

④　私が母の手を取って、その最期をみとろう

⑤　私の手で母を殺して、葬送や供養をしよう

問４　傍線部３「至極」の「極」と同じ読みになる「極」を含む熟語として、最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　極力　　②　極端　　③　極致　　④　極刑　　⑤　極意

問５　傍線部４「とりざたしけるとかや」の意味として、最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　議論の的になったようだ　　　　　②　評判になったようだ

③　批判を浴びたようだ　　　　　　　④　うらやまれたようだ

⑤　ありもしない噂を呼んだようだ

問６　傍線部５「言語に及びがたし」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　言葉では表現できないほどすばらしいことだ

②　言葉にするまでもない、単純明快なことだ

③　言葉で言い表せないほど悪いことだ

④　一言で決めつけるのはおかしいことだ

⑤　良いか悪いか、すぐには判断できないことだ

問７　傍線部６「死せざるや」の意味として、最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　あるいは死なない方がよかったのだろうか、いや、そうではないだろう

②　死ななかったのは、よいことだったのだろうか、わからない

③　なぜ死んでしまったのか、死ぬべきではなかったのだ

④　どうして死ななかったのか、死ぬべきだったのだ

⑤　死んでしまうべきだったのだろうか、疑問だ

問８　空欄　Ｂ　に入れる言葉として、最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　しかず　　②　おはず　　③　ならず

④　いはず　　⑤　やまず

問９　傍線部７「切りかねまじき」の意味として、最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　切ることなどあり得ない　　②　切らないとも限らない

③　切るとは限らない　　　　　④　切るとは思えない

⑤　切るに違いない

　問10　この文章の内容に合う文として最適なものを、次の①～⑤から選べ。

①　世間の俗説では、この武士が母の首を奪い、ひそかに葬ったことを、母の恥を隠す孝行であったと評価している。しかし、作者の意見では、親の名誉や恥を気にするのは孝行の道から外れるので、この武士の行為は孝行とはいえない。

②　世間の俗説では、この武士が母の恥を隠した孝行こそ、何よりも評価されるべきであるとしている。しかし、作者の意見では、孝行も重要だが、何か事件が起きた時に主君を守ることこそが、武士にとっては最も重要なのである。

③　世間の俗説では、この武士が母を殺害してでもその恥を隠した孝行を評価するあまり、忠義をも兼ね備えていると評価している。しかし、作者の意見では、母への孝行は認められるとしても、主君への忠義は認められない。

④　世間の俗説では、この武士は母を殺したけれども、その恥を隠したのだから孝行であったと評価している。しかし、作者の意見では、母を殺すなどということは絶対にしてはならないのであり、この武士を賞賛するのは誤りである。

⑤　世間の俗説では、この武士は母の命を助けることには失敗したが、その死後を弔った手腕がすばらしかったと評価している。しかし、作者の意見では、母の命を助けるために自分の命を捨てることこそが、何よりも尊い行為なのである。

【解答】

問１　①

問２　④

問３　⑤

問４　⑤

問５　②

問６　③

問７　④

問８　①

問９　②

問10 ④

【現代語訳】

　世間で言い伝えられている説に言うことには、そう遠くない昔、ある侍が、（奉公先のない）浪人の身となって、故郷の国に年老いた母だけを残し置いて、他の国に行き奉公をしたところ、（生計の見通しが立ち）母を呼び寄せるために、故郷の国に帰ると、（その途中）道の傍らに、盗人であるといって、木に縛りつけて人々の目に触れるように顔をさらしている者がいる。（近くに）立ち寄ってみると、（縛りつけられている者は）自分の母である。先の侍は、何としてでも助けたいといろいろと考えるけれども、どうにも助ける方法がない。そうであるからには、他の人に殺されて盗人の名を天下に広く知らせたりするより、自分の手で殺して（母が死んだ）跡を弔おうと思い、刀を抜いて、近くに付いていた（見張りの）番人たちを切って追い払い、母の首を（切り）取って逃げ去ってしまった。追い散らされた番人たちは、もとの所に戻り盗人を見ると、首がないので、胴体ばかりの死体を刑に処するというけれども、首がないために、誰ということもわからない。

　あの侍は、母の首をひそかに埋葬し、主人の所に帰って、おおよその事情を確かに述べ、「子という身で母の首を切る。不孝の罪を逃れることは難しい。このような不孝の（罪を負った）身で、主君に仕えることができるわけはない。職を辞すご命令をいただくならば、出家して母の来世の安楽を祈りたい」と申し上げたところ、主君は聞いて、「お前の行為は、親孝行の極みである。母を生かして恥をさらさせるよりは、首を切って名を知られないようにし、（母の）恥を覆い隠す愛情、才覚は、普通よりも飛びぬけて優れている」と、たいそう褒め称えなさり、（その侍は）そのままで仕官をした。その折、（その侍のことを）主君への忠義と親への孝行心とを兼ね備えた（優れた）侍であると、（世間では）評判であったとかいうことである。

　今あれこれと考えてみると、この侍の行為は、言葉では言い表せないほど悪いことである。その理由は、昔、宋の徽州の鮑寿孫という者の父が、賊によって捕らえられた。賊が、彼を樹に縛りつけて殺そうとする時、鮑寿孫が、来て拝礼し、父の死に代わること（＝父の代わりに自分が死ぬこと）を願う。賊は（父を思う情愛に）しみじみと感じて、二人とも命を助けた。この話と対照して思うと、先に記した侍も、母がからめとられた姿を見るならば、どうして（自ら）進んでその（母の）刑に代わって死なないのか。（いや、進んで死のうとすべきだった。）親のためには、名誉も恥をも命をも顧みなければならないことだろうか。（いや、顧みる必要はない。）それなのに、薄情にも親を切って名を隠し、恥を覆い隠そうと企てる。その罪悪は、五刑に処しても十分満足できるものではない。中国で、呉起が、自分の母を埋葬する所に着いて、顧みることなく放って、立ち退いたことでさえ、白楽天は、（呉起の行為を）烏の反哺にも劣っていたと思って、「昔、呉起という者がいた。母が亡くなって喪にも臨席しなかった。哀しいことであるよ、このような仲間は。その心は、鳥にさえも及ばない」と詩を作った。もし母を切った者を（白楽天に）見せるならば、（注）と同じであると非難するに違いない。このような大罪人を、親孝行な子であると褒めて用いることも不思議である。事変に遭遇し困難な事態に立ち至る時は、必ず主君の首をも切らないとはいえないような怪しげな者である。用心しなければならない。とがめなければならない。

　　（注）中国では梟の雛が母鳥を食べるという言い伝えがあり、梟は「親不

　　　　　孝者」の象徴とみなされることがあった。